

# パプアニューギニアでの2年間(完)

米田昌世

今回は、パプアニューギニア(以下、PGNとする)での生活体験を通して肌で感じたことを記すことにします。

## 現地人の生活

### (1) 住居

PGNは熱帯降雨林気候といわれる気候帯に属するだけあって、雨量が多いのは確かです。しかし、気温は一年を通しての最高が33程度とそれほど高くありませんし(高地はもっと低い)、自然が多いためか湿度が高くてもあまり気にはなりません。むしろ日本の本州の真夏の方が過ごしやすいのではないかと思います。

場所によって地震は時々発生しますが、台風はなく、また強風が吹くこともほとんどありません。このような気候であるため、極端に言えば着る物や履き物はいらぬし、家も雨さえしのぐことができれば十分です。したがって、都市部に住む一部の人間(全人口の約1割)を除き、現地の大半

の人たちが住む家は手造りの簡単なものです。

低地に建つ家は大体が高床式(写真1)です。ローズウッドやクウィラなど耐久性が高いとされている樹種の小丸太を地中に埋め立てて基礎とし、この上にラフな製材を並べて簡単な床を造り、壁は薄い板か竹で編み(要所には細い柱を入れ)、屋根は草ぶきというのが一般的な構造です。

一方、高地では寒い時期に火を使うこともあり、土間床方式が普通です。

### (2) 食べ物

彼らは狩猟民族ではなく、また農耕民族でもありません。採取民族に分類されています。すなわちほとんどの食べ物は日常の行動範囲の中で採取が可能です。タロやヤマなど主食のイモ類、バナナ、パパイヤ、マンゴー、グアバなどの果物は何の苦勞もなく手に入れることができます。また、動物性のタンパク質としては、ニワトリ、魚、それにたまには野ブタやワニや野ネズミの類も食卓に載ることがあります。

要は、自給自足で暮らしていけるということです。

このことに関連して、彼らには明日に備えて何かを蓄えるといった考えはほとんどないように思われます。最低限必要な物はいつでも簡単に作ったり、手に入れたりすることができるので、何も明日のことまで煩うことはないのです。



写真1 海辺に建つ高床式の家

### (3)酒の類

かつての彼らの文化の中には、容器の使用はほとんど見当たらず、このために酒を作ることもありませんでした。今でもいわゆる地酒の類は作られていません。アルコール類としてはビールが工場生産されているだけです。

したがって、昔は酒の上でのトラブルなどはなく、この点に関しては平和であったと思われます。現在はウイスキーやワインなどが輸入され、人々が割と自由に酒を飲むようになってきました。一方、前述のとおり彼らにはもともと飲酒の習慣はなく、飲み始めてせいせい数十年しか経っていません。このため彼らの身体はまだ飲酒に対応した体質になっておらず、往々にして悪酔いをする事が多く、酒に絡む犯罪の多いのが現状です。

したがって、例えば選挙がある時などは、ただでさえ普段よりも議論がエスカレートしますから、この期間中(投票日の前後各2週間)はトラブルを避けるために酒類の販売が禁止されたりします。

#### 重たい「カギ」

写真2は、毎日持ち歩いている鍵の束です。まず、自宅の玄関は二重ドアでそれぞれに1個ずつの錠が付いています。研究所では個室の鍵、同室内の書類入れロッカーと机の引き出しの鍵、秘書室(兼運転手控え室)の鍵が必要です。クルマの鍵(自家用車と公用車)、それにゴルフ場の鍵も大事なものの一つです。このほか、写真には写っていませんが、自宅の裏玄関の鍵2個、物置の鍵1

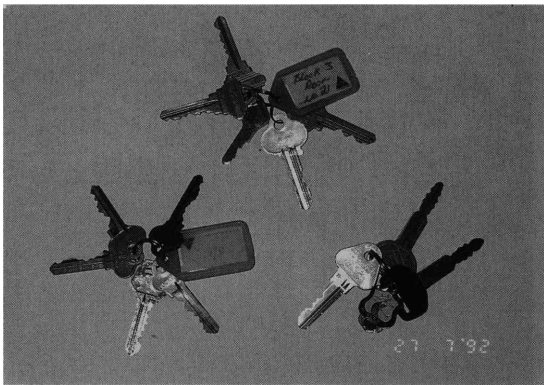


写真2 毎日持ち歩いている「カギ」の束

個は家に置いてありますし、研究所の机の引き出しの中には主要な研究棟や研究室の鍵の束を保管しています。

すなわち、これだけ戸締りを厳重にしておかなければ、簡単にドロボーに入られてしまう恐れがあります。この国に滞在中にいくつか犯罪に絡む事柄を見聞しましたが、私自身はあまり冒険心を起こさず、また行動範囲を広げなかったこともあり、幸いにも直接被害に遭うことはありませんでした。

#### 飛行場の数

PNGには実に多くの飛行場(空港というよりもピットリする)があります。定期便が発着する飛行場だけでも全国に101か所(このほかに不定期に使われる飛行場もいくつか)あります。ブリタニカ年鑑(1994年版)によると、この数はアメリカ、オーストラリア、ブラジル、カナダに次いで世界第5位です(ちなみに日本の空港数は71)。ただし、その規模は写真3に示すように平らな野原を滑走路にしただけの所が大半ですし、飛んでいるのは十人乗り程度のセスナ機がほとんどです。国際線に使える空港と呼べそうなのはこの中のわずかに3~4か所だけです。

かつてヨーロッパ人がこの国に入って最初にしたのは、キリスト教の布教でした。広い国土に散在する多くの部族に大して効率的に布教を進めるには、何と云っても飛行機で移動するのが一番です。このため多くの飛行場が作られました。

筆者も出張などで何回か飛行機を利用しました



写真3 飛行場(プロコ)とヒコーキ

が、今では外国人のみならず、現地のPNG人も結構高い料金（ほぼ日本と同じ）を払って乗っています。このように道路網の発達していないPNGでは飛行機が足代わりとして活躍しています。

### ゴロカショー

ハイランド地方には多くのPNG人が住んでいます。PNGのほぼ中央に位置していることもあり、様々な部族がこの地域に集まって定期的にお祭りが開かれます。特に南ハイランド州の州都ゴロカで2年に一度開催されるお祭り（ショー）は、全国から多数の部族が集まる最大規模のものです。

彼らの民族的な衣装（と言っても裸の身体に色を塗ったり、鳥の羽根を頭に付けたり、草や木の葉で編んだ腰褌）を身に付けてシンシン（Sing - Sing）という歌と踊りを披露します。部族によっては、弓矢あるいは槍を持った男だけの勇壮な戦士の行進（写真4）から、女だけのあたかもハワイアンダンスを思わせるソフトなものまで実に多様です。

### ラバウル

「さらばラバウルよ・...」の歌で有名なラバウルは、南緯2度、赤道間近に位置し、PNGでは3番目に大きな都市です。かつてはドイツが統治していました（1884年から第一次世界大戦後まで）。海もきれいですが（写真5）、町の中も広い道路と術路樹の配置がバランス良く、かつ整然としていて、さすがにドイツが町づくりを進めた所であることをうかがわせます。



写真4 ハイランド地方の部族の踊り

市内を見渡せる小高い丘の上には、旧ドイツ総督の館跡があります。また、この丘の途中には旧日本軍の作戦本部跡（現在はJapanese memorial）があり、名所の一つとなっています。

ラバウル近郊で製材工場を調査中に、オーストラリア人の経営者から「原木の中には、第二次世界大戦の時に日本軍が使用した銃弾が入り込んでいることがあり、製材時にトラブルの元になり、また歩留まり低下の原因となっている」と、実物と写真を見せられながら説明を受けたことがありました。それが旧日本軍のものか、あるいは連合軍のものか筆者には分かりかねますが、いずれにしてもこのような形で約50年前のPNGと日本との関わりを再認識させられました。

### さまざまな国際協力

我々のようにプロジェクトに携わる専門家のほかに、PNGの省庁に派遣され国の発展計画などを担当するアドバイザー、あるいは大学で教鞭を執る（水産や鉱山の分野）個別派遣の専門家がいいます。また、約50名の海外青年協力隊員（JOCV）が派遣され、体育、土木施工、園芸、自動車整備の指導など様々な分野で日本人が活躍しています。

一方、ほかの国の動きに目を向けてみると、まさに援助合戦の観があります。日本のJICAに相当する米国のUSAID、ドイツのGTZ、韓国のKICAなどが環境保護や農業技術協力の分野に職

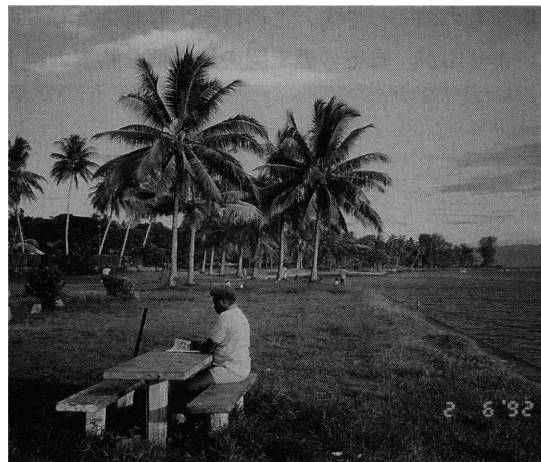


写真5 ラバウルの海辺の風景

員を派遣しています。

援助するそれぞれの国で色々な思惑があるものとは思いますが、基本的には経済の安定的な発展を通してPNG、ひいては世界の平和に関与しようとするものです。

また、国連ボランティアとして各種の高等専門学校で教鞭を執るミャンマー人、インド人、スリランカ人などもたくさんいます。

### 外から日本を眺めると

外国に住んでみると、ふだんは気がつかない<sup>些</sup>細な事柄から、あらためて日本の良い面、悪い面が見えてきます。

#### (1) 飽食時代のコメ騒動

昨年のコメ大凶作に端を発し、今年に入ってまもなく店頭から国産米が姿を消してしまいました。政府は緊急に米国、オーストラリア、中国、タイからのコメ輸入を決め、何とか危機を回避することができました。現在、量的な問題は解決されましたが、質的に日本人の好みに合わないという理由で、タイ米が捨てられるという事態が生じています。しかも、コメの輸入に際しては、国際的な相場を無視するほどの高い価格で購入しているながら、このような状況を外から見るにつけ「金萬」、「飽食」の日本の悪いイメージが一層鮮明に浮かび上がってきます。

#### (2) 形状・大きさのシビアな選別、そろえ過ぎ...

帰国後、日本のスーパーマーケットで買い物をした時に感じたのは、品数の多いことです。しかし、それにも増して野菜や果物の形状、大きさの均一にそろっているのには改めて驚かされました。まるでプラスチック製の紛い物のように見えました。

一方PNGのローカルマーケット(写真6)では、日曜日を除く毎日、自分たちの村で採れた野菜類を各自が決められた場所で店開きをしています。スペースの区切りは、ちょうど日本の各地で行われるお祭りの時の出店の感じです。そこでは様々な形状、大きさの野菜や果物、また魚やエビ、

カニなども売られています。日本の朝市と似たところもありますが、雰囲気はまったく違います。彼女ら(そこで働いているのは女性が多い)の態度からは、積極的に売ろうとしている様子はあまり見受けられません。「買いたい人がいればそこにお金を置いて、価格に見合う品を持って行ってください」とばかりに編み物をしたりしています。実にのんびりとしたものです。

#### (3) 製品性能の違いについて

一度、スーパーマーケットで中国(本土)製の安価なタオルと衣類(短ズボン)を買ったことがあります。外観的にはまったく問題はなかったのですが、一回の洗濯ですぐにその性能が明らかになりました。タオルは脱色され、一緒に洗濯をしていたほかの衣類にその色が着いてしまうし、ズボンは縫い目がすぐにほどけてきました。

また、例えばオーストラリア製のティッシュ(紙の箱に入った200枚入りの普通の製品)を一枚取り出そうとすると、ズルズルとつながって出てきます。当然箱も持ち上がってくるため、もう片方の手で箱を押さえたり、またはつながったティッシュをちぎるなどの作業が必要となります。日本製のものでは、こんなことはありえず片手で実に軽々と一枚ずつ引き出すことができます。

電化製品やカメラ、時計などの例を出すまでもなく、こんなちょっとした事柄からも日本製品の性能の良さが分かります。



写真6 ローカルマーケット  
(PNG人の好物、ビートルナッツが野菜類に並んでいる)

## おわりに

前にも述べたとおりPNGは一年を通しての最高気温が33 程度とそれほど高くはなく、地震は時々あっても、台風はありません。このような気候であるため極端に言えば着る物や履き物はいら  
ないし、家も雨さえしのぐことができれば十分です。また、必要最低限度の食べ物は日常の行動範囲の中で採取が可能です。すなわち自給自足で暮らしていける環境に恵まれた国といえます。

かつては、人間と自然とがバランス良く共生し、まさにこの世のパラダイスであったに違いがありません。しかし、この国にも時代とともに西洋文明が入り込み、彼らの生活に混乱を生じ始めています。

物質的には急激に近代化が進んでいますが、精神的にはそう簡単に変わるものではありません。当然、軋轢を生ずることになります。自給自足から貨幣経済への移行、モノの氾濫、都市への人口移動。しかし、都市に出ても容易に職を得ることはできません。カネを得るためのもっとも安易な方法は何か、すなわち金持ちからカネを奪うこと

になります。

犯罪は量的に増加し、質的にもエスカレートの傾向、例えば銀行強盗団の武装はかつての「弓矢と槍」から「ホームメイドガン」を経て、現在は闇ルートの「ピストル」や「ライフル」にと発展しています。

国際化の中で、一国だけが孤立して生きてはいけない以上、従来生き方を変えざるを得ないのは仕方のないことかも知れませんが、今後とも我々先進国側が援助を続けるとするならば、彼らのライフスタイルを急激に変えることなく、穏やかな変革を求めていくべきだと思います。

PNG人の国民性は非常に日本人に似ていると思います。個人的にはおとなしく、はにかみ屋が多いように感じます。子供たちの笑顔は世界中どこでも同じかも知れませんが、PNGの子供には特に親しみを感じます。2年間、緑にあふれた美しい国PNGで過ごせたことに感謝しつつ、3回にわたる連載を終わります。(完)

(林産試験場 経営科)